The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Focal Organizing Pneumonia : CT Appearance
Author(s)	河野, 伸明
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38483
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	河　野　伸　明（こう の のぶ あき）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学 位 記 番 号	第　11166　号
学位授与年月日	平成6年3月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	**Focal Organizing Pneumonia:CT Appearance** **（孤立性器質化肺炎の高分解能CT像）**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　小塚　隆弘 （副査） 教　授　西村　恒彦　　教　授　青笹　克之

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

孤立性腫瘤影の良悪の鑑別に関しては，石灰化と脂肪成分について詳細な研究がなされてきた。悪性と疑われる所見は，不整な辺縁を持つことと，石灰化や脂肪成分を持たないことであった。

良性の腫瘤に関しては，過誤腫や結核腫の報告はあるが，器質化肺炎（Focal Organizing Pneumonia: 以下FOP）に関するまとまった報告がなかった。これまでに肺癌を疑われて切除されたFOP症例も多い。

本研究の目的は，FOPのHigh Resolution CT像を明らかにすることにある。

【方法ならびに成績】

18症例の組織学的診断のついた孤立性器質化肺炎のHigh Resolut ion CT像を解析した。年齢は33〜77才（平均55才），男10人女8人であった。このうち15人が無症状で，3人に咳・喀痰などを認めた。

CT検査は全肺野を10㎜間隔でスキャンした後，腫瘤部に少なくとも5枚のHigh Resolution CTを追加した。

なお，胸部単純X線像では，この18症例はすべて肺癌との鑑別が困難であった。

【結果】

17／18例（94%）は不整な辺縁を有し，10例（56%）は周囲散布巣を，9例（50%）は胸膜陥入像を，9例（50%）はair-bronchogramを認めた。〈FOPの分類〉FOPは局在と形態から，以下の3つのタイプに分類される。Type A（n=5）：孤立性の小円形腫瘤（胸膜陥入像を（n=4）で認めた。）Type B（n=7）：胸膜と幅広く接する類円形の腫瘤（周囲散布巣と血管収束像を（n=6）で認めた。）Type C（n=6）：気管支血管周囲方向に広がる楕円形の腫瘤（周囲散布巣（n=3），胸膜陥入像（n=4））

【Follow-up Study】

8例でおこなわれた。6／8例で腫瘤の縮小や消失が見られた。

【結論】

本研究では，悪性所見と考えられていた不整な辺縁やair-bronchogramをFOPにおいて高頻度で認めた。しかし，タイプ分類によるとtype B,Cは良性病変として示唆される特徴を持っている。が，type Aに関してはHigh Resolution CTにおいても肺癌との鑑別は困難である。

また本研究では，CTによるfollow-up Studyの重要性が示された。

論文審査の結果の要旨

本論文は，肺癌との鑑別診断上，臨床的に重要な孤立性器質化肺炎（FOP:Focal Organizing Pneumonia）の高分解能CT上の画像所見を検討した論文である。FOPは抗生物質の多用で最近症例数の増加が見られ，胸部X線像では，肺癌との鑑別が困難であった。このためしばしば外科的切除術の対象となっていた。肺野型肺癌の高分解能CT所見については諸家の報告があるが，FOPのCT像に関する報告はこれまでになかった。

本論文では，従来から悪性を示唆する所見とされているair-bronchogram（50%）と，腫瘤の不整な辺縁（94%）が，FOPにおいても高頻度で認められることが示され，この点では肺癌との鑑別が困難であるとされた。しかし，その局在と形状から，胸膜に広く接する腫瘤（type B）と，気管支血管周囲に楕円形に広がる腫瘤（type C）では本疾患を強く疑い得るとの結論が得られている。胸膜や気管支血管周囲に接しない小円形腫瘤（type A）では，高分解能CTを用いても依然肺癌との鑑別が困難であることがわかり，今後の研究課題として残されている。また，経過観察のCTの検討から3−5週の経過でFOPでは陰影の縮小が多く認められることからtype A腫瘤では早急な生検へ，type B, C腫瘤では短期間でのfollow-up CTが有用であると示唆され，臨床的にも有意義である。

これらの結果はFOP研究の一指針となり，今後の肺野孤立性腫瘤の画像診断に寄与するものと思われ，学位に値すると考えられる。